

●映像インタビュー

勝 新太郎 今と今の谷間を撮る

『警視-K』の撮影は、予想通り超過密スケジュールで進行していた。監督・勝新太郎へのインタビューも、予定の日取りが二転・三転し、場合によっては撮影現場に一日詰めて、撮影の合間を縫って行なうというプランも示されたが、それすらも困難になり、このままでは最終締切に間に合わなくなる事態を目前にしていた。が、代案をたてるよりも、ともかくギリギリまで待ってみようというのが編集部の一致した意見だった。勝新太郎監督による『警視-K』は、そんな思いにさせるだけの魅力を持っていた。

そして幸運が訪れた。この日監督は、中村勘九郎氏の結婚式に出席するために撮影を中断したのだ。インタビューは、結婚式から帰った勝監督が、次の撮影打ち合わせに入るまでの間（といっても打ち合わせ時間に大幅にくらいこんでしまったのだが）を、なかば強引にいたで行なった。

たちの到着を知らせると、奥へ入ってくれという返事だった。いくぶん緊張しながらベッドルームへ入ると勝監督があの人なつつこい笑顔で私達を迎えてくれた。片手に水割りのグラスを持ち、赤いガウンを羽織った勝監督の最初の言葉は「なに飲む？ ビールそれともジュース？」だった。そのリラックした調子につりこまれてベッド・サイドにインタビューのセットを行なったのち……

——写真は撮らせていただいていたよよろしいですか？

勝 ああ、いいよ。

——そのまま……？

勝 俺はいいよ。もっとこういうふうにしようか、艶っぽく（ベッドに寄りかかってポーズをとる）。こういう演出なんだよ、俺は。決めてないんだよ。あなたたちがここへ来る前に、どんな写真が撮りたいと決めてきたって撮れるものじゃないんだよね。例えば芝の増上寺をバックに撮りたいって思っても撮れないんだ。勝新太郎がネクタイして背広着てるのを撮りたいと思ったって、これだからね



(ガウンの前をはだける)。これ撮ることになるんだから(と、カメラに身を乗り出しながら)。撮って、撮ってね。(次に毛布を首まで上げて)この恰好でいるときにね、「とっても撮れないからも少し毛布を下げて下さい」と云われても、それは撮れないんだよね。まあ、このくらいは下げてやるさ(と毛布を腰のところまで下げ)、そういう演出なのさ、俺は。

——その演出の方法についてうかがいたいのですが……

勝 ベつにキチッとあるわけではないんだけど、おもちゃ箱をひっくりかえして、その中で好きなものを撮って、というか、つまり「ゴッコ」の精神だよ。チャンバラゴッコとか、お医者さんゴッコとか、まますごいゴッコとかね。「ゴッコ」というのはいくら親がご飯ですよと呼びに来たって、そんなものは無視して夢中になっちゃってしまふものですよ。まあ、映画作りもそうなりたいたいんだけど、組合とかいりんなものがあって「何時までしか撮れませぬ」というのが入ってくる。これはちよつと違うことなんだよ。食うためとか生きるためとか、それからその時の流れでもって映画関係に入っちゃった人はそうなんだろうけど、映画へ入った以上はこういうものを作ろうと思ってきた人とは違うと思うんだ。そういう目的を持って映画に入った人というのは批判される人間でなくてはいけなと思うんだよ。皆がそうしてるからつって流れに沿って行っちゃったら何にもなくなっちゃうからね。

今は、総理大臣になりたいと思つて政治家になつた人が総理大臣になれなくて、総理大臣になれなくても、どこかの番頭役でも国のためになるならと思つて政治家になつた人が時の流れによつて総理大臣になつちゃう世の中だからね。「ゴッコ」の延長で熱中してい

かるといってお茶の間むけのドラマじゃない、かんじんなものが描かれてるんです。だから目が離せない。ワウワウドキドキしながら見てしまう。よくよくお茶の間にもそんなドラマが現れた、と思つていた矢先、ワン・クールで打ち切りになつてしまふというニュースが入ってきた。

勝 そう……。それでいいと思ふの。これが打ち切りになる、ね。

そうすると打ち切りになる間に皆さんが惜しいとか何とか言つてくれたりなんかするのね。それは一般の視聴者だけではなくて、薬屋内が特にね。俳優とかね。松田優作にしろ、誰にしろ、これは続けてほしいとね。もうその声で俺は十分だよ。何故かと言うと、その連中があとを継ぐんだから。

——かも知れませんけど、残念ですね。打ち切りになる理由はやはり視聴率で?

勝 視聴率ね……。(しばし考えこんで)でも、運もいんだよ。これ続いたら正月間に合わないんだ。アオイスタジオの休みが幾日かあるし、東京現像所の休みもあるしね。それでもう間に合わなくなつてしまつてゐるから。

——一本の撮影日数はどのくらいなんですか?

勝 実日数は少ないんだ、六日間とか一週間とかね。でもその時の状態で撮影がダメだったときには一日三時間ぐらいでピタッとやめちゃつたりなんかするから、やつぱり10日間から、まあ二週間ぐらいかかる時があるね。

——そうしますとテレビの週一本というのはかなりキツイですね。

勝 そうだね。テレビだからとか、映画だからつていうのはないね。自分の趣味でやつてるだけだからね。撮りたいものを撮るつていう

る人が、やつぱりプロになつてくれないとね、面白くなるんだよ。何千何万本という映画なり演劇なりがあつて、今はみんながそれをわかるようになったかも知れないけれど、最初はわからなかつたんだ。たとえば歌舞伎にしたつて、あそこはいい着物着てみんなが集まる社交場だった。そこに行つてストーリーがわからないからなんつていうのは恥ずかしいから、わかつたふりして帰つてたんだよ。わかつたふりして帰るから、やがてそのわからない難解なストーリーがわかつてくるんだよ。それがいいところなんだと思うんだ、俺は。ところが今はそれがなくなつちやつたんだよ。

——テレビの時代になると同時に、すべて説明してしまふようになってしまつた。

勝 だから俺は、もつといろんなことやつて批判されてもいいと思つてるんだ。批判されないようなこと俺がやつたらおかしいからね。映画とテレビの違いはこんなもんなだよ。映画というのは、街でパッといい女にめぐり逢つたとき、ああ、いい女だな、あいつどこに住んでゐるんだらうつて、後を追いかけて所番地を捜さうつていうもんなんだ。ところがテレビつていうのは、パッと目が合つたら(シナを作って)私どこに住んでんのよ、よかつたら遊びに来てつて、電話番号も所番地もすつかり教えてくれる。すこし前まではそんな違いがあつた。ところが今や、映画までもが相手に名刺渡してお世辞使うようなものになつちやつたんだ。わかりやすいけどね、それは本当のエンターテインメントではないんだよ。

——『警視-K』はそういうつくりじゃないですね。だからお茶の間の受けは良くないかも知れない。けれどもあそこには、映画の本当の面白さがあると思ひんです。音だけ聞いていれればおむねわ

ことかな。

——それが『警視-K』のきわだった魅力なんです、それにしてもワリに合わない仕事ですね。ところで月並みな質問ですが、監督の演出について——

勝 モーメント・モーメントというのかな、今と今の谷間というこつとあるよね。今、あなたと俺がこうやつて喋つてゐるとき、台本ないよね。(起きあがつて座りなおし、考えながら一言一言話す)で……。台本なしに喋つてゐる時に、あなた、ええとか何とか言はずいてくれる。俺はまだ次の喋ることを見つけていないにもかかわらず、うう……。なんて言ひだしますね。すると、何を言ひだすんだらうかと聞きますね。そういう顔になりますね。そうすると、……(じつと考えこんだ様子。しばらくして、ゆつくりと低い声で)……。ま、そのテレビつていうのは……。(ふいに普通の調子に戻つて)こういうモーメント・モーメントという



「警視-K」撮影風景

ことがあるのよね。今喋ってることと、次の言葉に、間ができるんだよね。

——役者さんに対する注文もそのあたりから……？

勝 俳優さんは、自分の人生のストーリーを知っちゃいけないんだ。自分は最後に死ぬんだ、だからこんどはこういういい役にしようなんて、そんな事考えちゃいけないわけだよ。役でなけりゃ五分後のことなんか誰も知らないんだから。ここで俺のインタビュアーが終ったあと皆さんがどうするのか知らない。めし食いに行くのか自動車に乗るのかね。そこがいいんだよ。だけど、これはドキュメンタリーじゃないよ。やっぱ、ヤラセには違いないんだ。十本の手足、それから目、そこに感情が出てくるんだから。

——すると役者さんは、あらかじめどうなるかは知らされてないんですか。

勝 うん、俳優さんには教えないね。なぜかという、俳優さんが台本貰ってからね、「今日飲みに行こうか」って俺が言うよね、「あつ、明日の場面のセリフがありますから今日は失礼します」なんていうんだよ。明日の場面のセリフがありますから、今日は失礼いたします？」明日のセリフをおぼえるのに、今からじゃ間に合わないよ。台本なんてのは、貰ってからその役を掴むってことではもう間に合わないの。俺とっしょに飲みにいったらいい。(マネージャーの入ってきた気配に、すつと振り向いて) 奥さんは？

マネージャー いま外へ買い物に。

勝 うん……(インタビュアーを続けようとする) こうやって喋ってる時に、「奥さんは？」なんて言うでしょう。話とは関係ないのよ。でも、こここのいいでしょう、面白いじゃない。(つぶした

声で) つまりだね、世の中の映画というものは、(急にふり向いて、小声のくだけた調子で) 奥さんは？ ああ面白い物。(戻って) ということなの。

——第二話でしたか、追い詰められた犯人が「親が子の血を吸う……」なんて、芝居がかった科目を喋っているとき、ふいに「煙草は喫っていいか？」と勝さんがやるあの呼吸ですね。

勝 いやあ、あれは最低だよ、俺はあれキライなの。あの映画観てもらったら俺は恥ずかしいの。あれよりか次の『リリー』の方がよくできたと思ってるんだけどね。

——そんなことありません。あれは傑作です。

勝 ……

——勝さんの演出には、緊張したシーンの横腹に、ひよいと空気穴をあけるようなところが必ずありますね。ああいうのは現場に入ってから出てくるんですか？

勝 考えないよ。今日みたいなもんだよ。由美さん(マネージャー)が、「インタビュアーの方が来てくれましたよ」っていう。「では、すぐ今、来てくれ」って答える。だけど俺はこんな形だから、「それでもいいですか？ 背広も着ないでインタビュアーしても」と由美さんがいう。「ああ、いいよ」っていったの。インタビュアーだったら俳優だから、世間がいい印象を与えたいからたいがい背広のひとつも着ますよ。それがこんな恰好でインタビュアーに応じる。なんにもスタンドブレイじゃない。じゃないけれど、今日はこれが自然だから。明日のインタビュアーだったら変わるかも知れないけれど、今日のインタビュアーはこれなんだよ。これが本当なんだよ……(先程から隣室で話し声がしていたが、ここになって急に人が増えてきた様子。勝、

マネージャーを呼び出して誰が来ているか聞く。打ち合わせのスタッフが揃った模様。次の『警視-K』で以前使ったクラブを使う短い打ち合わせ。そこで中村玉緒さんと奥村真粧美さんが出会うシーンを撮るらしい。)

勝 (インタビュアーに) いま俺は十八、九の女の子ばかりと会って話してるけど、いいね。会話が違うからね。ところが視聴者はそういう会話がテレビから出てくるのに慣れないんだよ、残念なことだね。

——慣らすディレクターもいないんです。

勝 そうそう、だからといってあきらめちゃいけない、この道は絶対続けなくちゃいけないんだ。どんなに中止されようが何されようが。東映の社長岡田茂とか日本テレビでもそうだけど、いつかテレビではドラマはこんなものになるって言ってるんだよ。だけど視聴率が悪いから皆んな変えてやめちゃうんだよ。やめちゃいけないんだ。敗北ですよ。続けるには金がかかるだろうけど。

俺は引き算する映画が好きだね。映像だから、影がなくてチャダメ。例えば俺がこうベッドに寝てるでしょ、ノートを出して、ベッド・サイドの照明と自分の顔の間にスッと横からさしこんで光をささぎる。視線をそのノートにつけて、左から右へ振り元へ戻す、このときね、俺の表情を撮るだけでね、きつと誰か立っただろう、立っただけと言葉が受け入れられなくて、きつと行っちゃったんだろう、ということがわかるわけだ。その俺の演技だけ撮ればいいじゃないかと思うんだね。この光がネオンサインだとして、このノートが女だとしてね。(今度は先と同じ動作で、ノートに話しかけようとしてすぐに落胆の表情をつくる) と、これでフラれちゃったのね。

ところがこの(ノートの)女優さんは(ギヤラの)高い女優さんを使わなければ、その演技はつくりものになっちゃうんだ。女優さんが「あら、私写ってなかったわね」といってもいい。こちらのリアクションを撮るのには、やはり(ギヤラの)高い女優さんを使わなくちゃいいリアクションは撮れないんだよ。そういうところはほんと皆んな豊かにならなくちゃ。

——贅沢でなければ、ということですか？

勝 いや、演技の元というのは、自分の弱点をカバーすることなんだね。例えば、あなたがとても好きな人のところへインタビュアーに行つたとするね、すると、普段の自分のインタビュアーの仕方がどこへ行っちゃったんだろうというふうになっちゃうね。これが演技なわけだよ。ところが見おろせるような人のときにはほとんど出来るわけだ。一旦でもこいつ俺に惚れてるなと思つたら(ぐつと身を乗

「警視-K」打ち合わせ



り出してインタビューの顔スレスレに顔を近づけて、ニヤニヤ笑いながらインタビューの頬を撫でる。低い声で「ん……しばらくだな、どうしてる。(元へ戻る)ところが自分があなたに惚れちゃったら、とてもこんなことできないよ。テレちゃって。わざと(ふんぞり返って)おい元氣か(笑)、としなくてはならない。それが演技なんだ。まずラブシーン撮るときは、男には二十代だったら一週間は禁欲生活しろって云うよ。三十代だったら半月は禁欲生活って、俺ぐらいだったら、まあ、一時間ぐらい禁欲生活しろって……(笑)なるよ。つまらない女だって、こうやってるだけで楽しくなってくるんだ。演技プランなんていらなんだよ、楽しいから。遊びに行くのにマスターベーションしてから行って「らんない、こんなつまないことないよ。逆に、タマッてね、女だらけのところへ行つて酒ついで貰ったらね、楽しいね。そこまでもつてって俳優さんに演技させてんだよ。だから台本はいらなんだ。台本の通りになんかしないでくれと……」。

セリフ回しというのがあるね。例えば「湯島の白梅」でね、「月は照っても心は闇だ……(以下ズツと続く)」これをリアルに言うのと、「別れるなんて芸者時代にいうことよ。今の私は按摩の笛もこわいんです。死ねと行って下さい……な」その「な」それから、「いとお月さ……ま」の「ま」演劇のときは月が写せないから、その「ま」によってお月さまを想像させるわけだね。映画のときは(スラックと)「ああいいお月さま」と言っちゃっても、月がボンと画面に出れば、もうそれでいいわけだ。ところがそれを一度やめてみようよ。それは俺は出来るわけだ。(芝居口調になって)「あそびの金にも困っていたが、よう、兄さん、俺の話聞いてくんねえ……よう」。

この役を女優さんにしたら、こうやって自然に、(再び抱擁をする)できますか。できませんよ。だから真粧美に出てもらわないと困るんだよ。これ見てたら、中には親子でイチャイチャして、いやらしいと言う人がいるかもしれないよ。でも、俺は真粧美に教わるんだよ。今度の話では、十六年前に別れた女房が(中村)玉緒で、そのことを真粧美は知らないで、偶然会ってしまうわけだ。これから今日それを撮るんだけど、真粧美と玉緒がどういう芝居をするか、楽しみにしてるんだ。

毎回終りに食べ物が出てきますが……

奥村 この前、お香ことバターでね。

勝 現実にあるよね、バターとキャベツの芯を間違えたりするの。

あれは真粧美さんと話をしてるうちに出来るわけですか。

勝 そうそう。体温計をみそ汁の中に入れるというケツサクなシーンがありましたね。

勝 面白いでしょ。犯人があがっちゃったらストーリーは終わりなんだけれども、それから二人のやりとりがあるというのね。今回のもすごくいいのをいま見つけたのね。

二話でしたか、真粧美さんがボーイフレンドと歩いているのを見つけて、パトカーの中から「その肩を組んでる二人、離れなさい」というのがありましたね。

勝 あれはたまたま、真粧美のボーイフレンドが来たから、いっしょに出したの。(奥村に)もう彼はアメリカへ帰っちゃったんだろ。今またボーイフレンド違ってるの？

の「よう」なんていうのがセリフ回しだよ。これをいま風に言ったら、(ボソボソと)「去年から金がなくて遊びに……困ってたし、俺の言うこと聞いてくれないかなあ」という言い方になるわけだね。そのどっちがいいかということになる。そこが問題なんだけど、俺は後の方を今やってるわけ。前の方が得意なんだけど、『座頭市』『兵隊やくざ』『悪名』……。「何の用やて、決まったるやないけ、おう。ありつたけの鉛の弾ぶちこんだるやないけ……『悪名』の一節が続く」。いま違うことやってるんだけど、皆んな勝新太郎主演といったら、そういうのを喜ぶわけだよ。ところが俺はもうそういうのはあきてるんだ。

来週(十二月二日)の『警視-K』見てよ。川谷(拓三)の死ぬ話。俺は死を賭けるということは出来ないの。だから俳優さんを使って、そいつが死ぬまで愛せるようなものを描けるんだ。あなたは何のためだったら死んでくれるかもわからないけど、そういう愛を俺に言ってくれたって、俺は困っちゃうからね。「俺だって、死ぬ」とは言えないものね。そんなことをやってみたかったの。(娘さんで『警視-K』でも娘役で出演している奥村真粧美さんが来る。)

勝 (いきなり流暢な英語で) You're back a homile-slie.

奥村 Yes.

勝 Well, while you don't come to my hotel.

(勝、真粧美さんを抱きよせて囁きながら抱擁する)

勝 ママは？

奥村 ママはね、スタッフの人と打ち合わせしてる。

勝 (インタビューに) これなんだよ、これに演出がありますか。

奥村 うん。あれは、ボーイフレンドだもの。

勝 ああ……(ちよっと理解できないようす)。あれはボーイフレンドだろ。まだほかにいるの？

奥村 だからたくさんいるわけ。

勝 彼だけでなくてもいいわけ？

奥村 うん。

勝 彼がもしも他のガールフレンド作っても別にどうっていいことないの？

奥村 うん。

勝 (インタビューに) こういうことなんだよね。今のを、こっちから(カメラを想定して)回しとけて撮っちゃうんだから。これが俺の演出なんだ。

勝さんの演出は毎回ずいぶん大胆なカメラワークを見せてくれますが……。

勝 カメラは一応覗くけど、綺麗な映像というのは、もうコマースャルにはかないませんよ。コマースャルというのは、六十秒を一周間ぐらいかけて撮るわけだから。コマースャルに音楽があるから、コマースャルのない時(劇中)には音楽なんか入れたくないの。コマースャルの絵の方が、どれだけ我々の作ってる映像よりいいかというところを見せてもいいと思うの。コマースャルに負けず、なんていう映像を俺は作りたくないもの。ただ人間だけは、絶対に俺が描かなくちゃダメだと思ってるんだ。

クロースアップやワン・ショット長まわしに生きいきとした呼吸を感じるのですが……。

勝 最大唯一の観客は俺なんだ。商品価値はあると思うよ、俺には。

稀少価値がなくちやダメだ。しかし、稀少価値というのは、最初からそんなに、視聴率がいいものじゃないよ。商品価値というものは最初出しというのはなかなか難しいから、それはヤメとけばいいと。ヤメたからといって、急に一般人の人と同じような撮り方してしまつたら、それは何の意味もないし、俺の道もなくなつちゃうからね。——どういう映像を作ろうかという、アイデアはどこから出てくるんですか。

勝 映画からではないね。今見てるものだよ。映画というのは演技した人たち（の像）が編集されて出てくるものだから。今俺たちが喋ってるあなたの顔と目とか、笑い顔とか、演技じゃないよね。これを撮りたいんだ。映画を先生にしてないの、私生活が俺の先生だと思うんだ。

——最初の映画は『顔役』（71年）でしたか、かなりユニークな作品でしたね。あれを自分で撮ろうというキッカケはどういうところからなんですか。

勝 いろんな、古いといつてはいけなくれども、監督さんとやるとき、例えば森の石松をやつたとするとね、旅籠へ入って、パッパッパッと服を叩くとホコリがパッと立つわけだ。そこで「おい、部屋あけてくれ」というとね、監督が、「いや、そこはホコリを立てないで下さい」「どうしてですか」「皆んなホコリが立ってないんだから、勝さんだけがホコリが立つとおかしい」「だけど俺は何十里も歩いてきたんだから、ホコリが立たないとおかしいじゃないか」「いや、そこは勝さんもやっぱり綺麗な着物を着て下さい」「ああそう、それはいいや」となるんだけど、この辺に俺は矛盾を感じる。すると、俺の引き出しにはまず一つの、俺がやるときにはそうじゃない

——毎回ラストに食事の話が出てきますが、本当に台本なしで撮られるんですか？

奥村 そう、話しているうちに決まるの。初めのころはお味噌汁でいこうっている考えてたの。でもそれだけではということでも最近はお食事にしてるの。

——台本なしではスタッフの人も大変でしょうね。

奥村 そうね。スタッフにはめぐまれてるんです。大映京都の座頭市以来の人たちですから。

——こんどはまた複雑な役をおやりになるんですね。

奥村 そうなんですよ。お母さんとはどうなるのかなって、いま思ってるんですよ。やってみないとわかんないという感じ。ママってというのは、やっぱり演技する人でしょ。パパの場合は演技なんだけど、自然といえれば自然ですからね。

——ふつうのテレビ番組よりずいぶん撮影に時間がかかっているようですね。

奥村 ええ、自分で見て、悪いなと思つたら何度でも気に入るまで撮り直しますからね。

勝 （戻ってきていきなり）八〇年代というのはね、東大出たりなんかした批評家が、映像とかそういうものを批評するのではなくて、大学へもどこへも行かないで、自分が体験してきたこと、エクスペリエンスをたくさん持つてる人たちが映画を見て批評する、その人たちがエリートになる時代だよ。いい大学を出た人がエリートになる時代は七九年で終了だよ。八〇年代からはね、俺やなんかと同じ者の時代だよ。

——頭で演出するよりも体が演出するという感じですね。

という物がたまるね。そういうたまつた、たまつた物が、引き出しをガラッとあけたときにパッと出てきて『顔役』みたいなものができたんだ。

子供の頃から、自分のやりたいものは、どんなに親父だとか、先輩たちから、それはいけないって言われてもね、自分でいけないと認めないかぎりには、俺はやっちゃうの。自分でいけないと思つたら、やっぱり親父やなんか言つてたのが正しかったなって戻すこともあつたけど。例えばロケハン行くとね、ロケハンだから仕事なんだけど、自分が遊んじゃわかないとイヤなの。遊びに行つたら、たままそれが役に立つという考え方なんだ。

——日常生活が演出ということにもなるんですか？

勝 そういうこともないんだけどね。俺には、随分苦労したでしょうねとか、努力したでしょうねと言われても、それ全部言葉があてはまらないのね。一所懸命やつたことない、努力したことない、苦労したことない。座頭市の立ち回りの練習にしたつて、練習なんのために練習なんて、真粧美に教えたことないの。このままいて、カメラに写つてるときに、少しアクビしてごらんとか、アクビしててパパと目が合ったときにアクビしてないようにアーアーと歌にごまかすとかなんとか、そういうことが出来るかどうかやつてごらんとかね、そういうふうにしていっちゃうわけ。でもまあ、最高の女優さんじゃないけど、最高の俺の娘役の人にめぐりあつたっていう感じだね。

（勝監督が隣の部屋へ行ったので、その間に奥村真粧美さんにインタビューを続ける。）

勝 そう、自分の中に溜つてるゴミみたいなものだね。見てるうちにいやだと思つたもので、いやだからサヨナラつて捨ててしまえばいいものだけど、ある日ふつと考えて、捨てるより、俺の映画のストーリーのものにしたら、財産がどれだけあるかってことだよ。映画作りの財産というのは、金じゃないんだよ。やっぱり「徳」、人徳の徳、スタッフがついてくる徳と、才能だよ、センチビリティだよ。それしかないんだよ。金で映画は作れないんだ。

——テレビでは最近、ビデオによる撮影が主流になりつつあるようですが、勝さんはビデオに興味をお持ちですか？

勝 俺はどちらかと言うと興味あるけどね、あれは陰影がなくて、キレイに写りすぎるとから楽しみがないのね。映画というのはカットのつみ重ね。例えばこのコップを撮るのに、こういうふう（スタンドの光を当てる）ライティングして撮る。ビデオの場合は、こうやったら（スタンドを離しておく）これで全部写ってるわけよ、きれいに。そのつみ重ねの違いがあるんだね。

ビデオは画がきれいだから、登場人物はテストしないで撮つたほうがいいね。天は二物を与えずだけど、二物を与えられてしまったらもうツーマッチなんだよ。どつちかはヘタな方がいいと思うね。

——映画を作られる予定はないですか。

勝 来年撮るよ。日本で撮れないようなすごいものをドン、ドン、ドンと撮るから。

——それは楽しみです。忙しいところを、どうもありがとうございます。

勝 できることがあつたら力になるから、これはとてもいい本だ。

勝プロのひと⑤

夏文彦

勝プロでテレビ映画の製作を続けながら、勝さんは、映画作りのことを思い続けていた。

引越の下サクサで、本の整理がまだつかず、正確な資料を引くことができないのだが、『京都市民映画祭』の第一回で（だったと思う。受賞者にピラニア軍団が入っていた年だ）特別賞を受けた勝さんが、明快に「できることなら、本当の映画を作って賞をもらいたかった」とスピーチしていたのを、ぼくは舞台のソデで聞き、そうだろうなア、と一人うなずいた憶えがある。

『痛快!! 河内山宗俊』と『さらば浪人』の現場で、映画撮影の生き字引、と言って良い宮川一夫さんと、何度か雑談する機会を持ちながら、ぼくがいちばん鮮烈に記憶しているのは、映画草創期のエピソード

れの場合も、半年で区切られているのだ。

「金もうけするために作った勝プロではない」と言い、「良い物を作る」という勝さんの姿勢は、そのようにタテマエとホンネに分かれず、一貫していた。

一人の監督が、同時に二話分を撮ってしまおうという、ただただ経済効率だけを考え、そこから生れた『二本撮り』などという手抜きが、平然と横行しているテレビ映画の世界で、勝プロが示してきた信念と理性、それに誠実さは、何度でもくり返して語られて良い。役者馬鹿の引き算上手、などというゴシップのレベルでは、とても捉えきれない、それは狂気にさえ写る、正気なのだ。

勝プロ倒産後の、マスコミの悪騒ぎは、ここところを、完全に取り返え、ゴシップ・レベルに終始していた。そんな中で、唯一人正気だったのは、当の勝さんだった。

「俺が倒産したら、世間では、ノンキナトーサンとか何とか言うだろう。しかし、この動き（応急

放送日 昭和55年12月2日 21:00 - 21:54

警視-K

オワリの日

製作 ◆ 勝プロダクション 日本テレビ
No. 9 決定稿
『警視-K』シナリオ表紙

ではなかった。宮川さんが原田さんに向って、
「芳雄ちゃん、ホンペンやろうよ」

とささやいた一言なのだ。勝さんだけではなく、勝プロのテレビ映画の現場を支えているスタッフは、大

なり小なりそうした思いを胸に抱いている人たちののだ。
もちろんこれは「活動屋」なら、誰もが抱いている思いだろう。だが、勝プロの現場に結集したスタッフは、本稿でくわしく述べてきたように、映画作りでは戦後最高の実績を持つスタープロの現場を支えた人たちなのだ。他のテレビ映画の現場で聞いたその種の言葉とは、厚みと熱が違っていた。

しかし、依然として映画作りを準備できないまま、勝プロは78、79年と『新座頭市』を撮り続ける。

この際、注目しておかねばならないのは、勝プロのテレビ映画が、本格的には、必ず2クール（26話）で終わっていることだろう。四度もくり返して製作されるほど評判が良く、視聴率も高い『座頭市』さえ、いず

手当ての借金集め)をドキュメンタリーにしたら、ある角度から見たら、喜劇だろう、と思っていた」

(記者会見での発言)

勝プロは、このように、倒産すべくして倒産したのだ。それは、必然的ななりゆきだった。今回のできごと、悲喜劇を見なければならぬとすれば、勝さんの悲劇は、たったひとつ、タテマエとホンネをたくみに融合し、ある方向へ導き得る存在を、自らのプロダクション内部に、ついに育て上げられなかったことだろう。

そして、誰よりもそれを知っていたのは、当の勝さんだったはずだ。そんな正気が『影武者』を選ばせたのである。

世界のクロサワが久々に撮る超大作時代劇は、勝さんが、自らのプロダクションを倒産に追い込むほどに持て余していた「人間、バカになりたいんだよな。気狂いになりたい」(ムービーマガジン「20号」という、俳優としての本能に根ざした、不可避的な欲求の嵩まりを、何の心配も

なく、十全に満足させ得る場として写っていたはずなのだ。

そして一方、製作者・監督としては、プログラマビクチャーを喰いつくしたかにさえ見える『大作主義』への、ある見極めがあったはずだ。『影武者』に出演し、経済的にも心理的にも勝プロのバランスを取り直した後の、勝さんの映画戦略がどのようなものであったかは、例の主役交代事件で、ついに聞く機会すら失われてしまった。

あの事件には、ついに報道されなかった「闇」がある、とぼくは思っている。その闇がどんなものだったのかについて、ある推測を抱いているのだが、あくまでも推測にすぎず、本稿の目的をも逸脱するので、ここでは触れない。

だが、くやまれるのは、その闇が、文字通りの大作を経た勝さんの映画作りをも、確実に呑み込んでしまったことである。

80年、勝プロは『警視-K』の製作を開始する。この、テレビ映画はじまって以来、と言って良い傑作に

ついて、ぼくは以前この欄に「観客に向けて作られていた番組である」と書いた、つまり勝さんは『警視-K』という番組で、壮絶に映画をやっていた、と思うのだ。

勝さんが『影武者』から脱け、しまった以上、勝プロの製作の場が、当面そこしか求められなかったのは、残念ながら、自然ななりゆきだった。そして、打切りに到る局と視聴者の反応も、ある時期から、勝さん自身は予感していたはずだ、とぼくは確信している。あれもまた勝プロの「不死身の戦い」の続編だったのであり、「勝新太郎の映画的死」(山根貞男氏)だったのである。

だが、この連載でくり返し述べてきたように、勝プロは戦後日本映画史上に、不滅の金字塔を打ち立ててきた、スタープロなのだ。そして、勝新太郎という並外れた才能を不要とするほど、日本映画は豊かではない。そう速くない日に、勝プロが再興されることを信じて、再度メッセーじさせていたたく——勝新太郎さん、頑張ってください。

俺の山は

イヌーゾフォーラム
'86.6月号

もう
じき



爆発するんだ

勝新太郎

インタビュ―

悲しみの見えない悲しみ

勝さんには以前、「警視-K」製作勝プロダクション／日本テレビ、十三話中八話勝新太郎監督を放映していた頃インタビュー（本誌'81.2月号）したことがあります。あれから五年、未だ「警視-K」の印象が強烈に残っていて、勝さんは次に何を撮るんだろうか、映画は撮らないだろうか、ずーっと期待していたんです。

今回は本誌で、俳優や作家、あるいはキャメラマンやシナリオライターなどを本業としていながらも、映画を監督した、もう一つの監督の系譜って言うんでしょうか、その辺の特集を組むことになって、それで勝さんに、俳優が映画を監督する魅力や独特な勝さんの演出法などについてお話を聞けたらと思って伺いました。最初は「顔役」(71)ですけれど、その動機あたりから……。

勝 そうだな。つまり監督をするってことは自分の「デイズニーランド」を作るみたいなんもんなんだ。他の人が案内してくれるマジック・ミラーとか、お化け屋敷とか、ジェットコースターなんかに飽きたんだね。自分の「デイズニーランド」が欲しくなってくるわけだ。自分の「おもちゃ箱」の中から、自分の好きなおもちゃを出して、それをずつつなげ

て並べてみたくなる時がある。自分の持物なから、人にビック・アップしてもらおうよりは、自分で選ぶ方がいい。自分で選んじやったものを、つないでみる。例えば私生活の演技、台詞ってのがなくても、感情は眼に現われる。眼で相手の人が「今日はマズいんだな」とか「この人はいやがってるんだな」とか「この人は喜んでるんだな」とか「この人は悲しんでるんだな」とか、いろんなことがわかる。ところが、映画では、「今私は悲しんでいるんです」「今私は怒ってるんです」というような、台詞でわからせる簡単な表現方法があるわけで、言葉で全部云っちゃう。それは多分シエークスピアでも同じだ。(身ぶりを交えて)よくきてくれた、私はあなたがくるのを待っていた「顔をしかめ、声をひそめて」「こんな厭な奴はいない」と、自分の本当の心を台詞でお客さんにつたえる演技方法もある。悲しみが見える悲しみっていうのは、いやなもんだよ。例えば、お葬式に行くときよく見かける(うつむき、鼻をすする)あたしはこんな悲しいんですよ」って、悲しんでいる証拠を残さないよ、来た価値がない、みたいなの。そういうのは、人間の裕福でない表現方法っていうのかな。本当は自分の心の中に悲しみを保持してさえいれば、相手がどんな風に誤解したっていいわけだよ。だけど、お葬式ってのは、

他人が死んで自分の心にそれほど悲しみが無いから「こんなに悲しんでいる」って表情をして帰るわけだ。逆に、悲しみが見える悲しみ、というものの他に、悲しみが見えない悲しみ、というのがある。それは何かというと、例えば、よく子供が弔問客の前でキヤッキヤッキキヤッキ喜んで遊んでると、客が「かわいそうに……」っていうよね。「あの子何も知らないで、ただ喜んでるけど、あれを見ると涙がでるわ」なんて、よく言うじゃないか。そういう時に、子供にまで演技させちゃう演出方法というのはよくないんじゃないの。子供は自由にしてほしい。編集のつなぎ方で、その場面が非常に悲しい場面としてよりあがってくればいいわけであってさ。

見えなくてもいいものを無理に見せようとして説明過多になるわけですね。

勝 そうそう、だからよくインタビュ―してもね、(何度も首肯く真似をする)なんでも首肯している人がいる。よく聞いてくれてるなあと思つて、その人に後で何の話してた？って聞くと、全然聞いてない場合が多い(笑)。首肯いちゃあいるんだけどね。そういう人より、ポケーンとしていて、あんまり聞いてないような顔してる人の方が、よく聞いているってことがある。それは「私生活の演技」といってね、人間てのはみんなそういうさを持つ

勝新太郎のインタビュー

っているわけだ。素人さんの演技と、プロの女優さんの演技と、どっちが深いかというところ、それはもちろんプロの方なんだけど、素人さんの演技にはかなわないんだよね。女優さんの演技ってのは台本の中から生れてくる演技だから。

「監視-K」では俳優さんに台本を渡さなかったという話も聞きましたけど……

勝 いや、渡してたよ。ただ、渡してた台本の中から、どのくらい眼で台詞が読めるのかっていうところだよ。

——つまり、台詞をどう表現するかということですか。

勝 そう、眼で台詞を言えば一番いい。早い話が、例えば、絵——肖像画なんか見ると、まず眼でいくんじゃないの。処女であろうが、年寄りであろうが、大概肖像画の顔ってのは、シワだとか描き込まれて、そういう眼の描ける人、シワの描ける人が、やっぱり西描きさんとしてうまいんじゃないの。それと同じように俳優さんも、眼でものが言える俳優さんと、目でしかものが言えない俳優さんと、二通りあると思う。ところが今の時代は口で台詞が読める方の俳優さんが名優として育って、やっっているみたいなのがある。つまり、あんまりNGださない人、台本を本番前に覚えちゃって、監督の言った通りに出来る人ね。

——勝さんは実際にそういう作品をご覧になったことがあるんでしょうか。

勝 うん、あるよ。その延長線上で今、プロでやってる人もいるじゃない。

——ええ。先程勝さんは「掛け算とおっしゃいましたが、それについてもう少しお聞きしたいのですが。

勝 例えば、「ビバリーヒルズ・コップ」って映画があったけど、あれなんかは掛け算の映画だよ。引き算もしてるけど、掛け算するところはもの凄く掛け算してる。嘘なんだけども、突える、楽しくなる。楽しくなるのはやっぱり掛け算だからなんだ。足し算なんかしても、たいして私生活と変わらないわけだもの。思いきった嘘——掛け算するのは嘘になるわけだ。だけど、いい趣味の嘘はいいけど、悪い趣味の嘘では掛け算されちゃたまらないよね。

——いい趣味の嘘とは……

勝 つまり、十九歳なら十九歳、二十歳なら二十歳、三十歳なら三十歳までの体験の中から趣味ってのはでてくるわけだから、その体験の中で、会話でいいジョークが来るとか、いいワイ談が来るとか、非常に楽しい趣味のいいイタズラが来るとか、趣味のいい嘘のセックス——プレイだよ、趣味のいい遊び、そういうことをしてきた人が、いい趣味

彼らは大変使われて、今忙しい俳優さん達なんだろうけども、その人達が今度映画を作り始めたら、また台詞ばかりのものになっちゃう。目でものが言えない俳優さんというのは、駄目なんだよ。例えばあなた達が会社の中にいても、ごく親しい、悪口がいろいろある位の仲だったとしたら、もう眼で通じちゃうでしょう。

——家庭の中でも、ちょっととした呼びかけは、大体眼で通じますよね。

勝 そうなんだよね。結局、映画の先生は、私生活の中、街を歩いている時とか、遊びに行った時とか、そういうところにいるわけなんだ。映画の素人は、そういうところに沢山ある。いま映画館でやってる映画見て勉強になるなんてことは、日本の場合、まずないんじゃないか。

趣味のいい嘘の掛け算

——でも、若い人が8ミリで映画を作ろうとする熱は依然強いものがあるんですけど、結構彼らは映画館で見た映画をお手本にしてるんですよ。もともと古い作品が多かったり、ゴダールとかその辺に固定している感じも強いんですけど。

勝 いい映画をお手本にしたいって気持ちは当然あるだろうね。だけど、自分のずるさと

か、冷たさとか、温かさとか、自分から出発した方がやっぱりいいよね。

例えば、今の若い人というのは、なんでもない映画のショット——手と手が握り合っているショットがあったとしたら、その握り合った手の間から、ギューンと玉のような汗がでてくる、そういうことを撮りたがっているんじゃないの、割合。でも、どうせやるんなら、もつと嘘に発展したものをやった方がいい。嘘のもの、というのは、やっぱり、掛け算。しなと出てこないわけだからね。例えばキスしたとすることでしよう、そうすると唇の中にカメラ入れて舌と舌がからみあうところを撮りたくないかと思う。のどちんこの奥をカメラ・ポジションにして、舌が中に入ってくるころ、自分の舌がからんでいくところまで撮りたいって気持があるんじゃないかでも、そういうものを撮っていたとしても、やっぱりフリーリングが大事だということに後から気がつくんだよね。最初8ミリで撮り始めるとなると、今の人は自由だから、こういうことをしてはいけないとか、こういう風にしろとか、命令されることがないから、自分の中で好きに撮るんだらうけれど。8ミリカメラはかるいから、どんな所からでもとれるから、子供っぽいっていうのかな……



かないと駄目だと思うんだよね。

——それは俳優論としても聞ける話だと思います。

勝 監督も俳優もプロデューサーも同じなんだけど、結局、最終的に映画するのはね、脚本家同志で映画を作り始めても、終る頃にはみんな敵になっちゃうわけだよ。それれみん、夫婦関係とよく似ててね、結婚した時仲がいいんだよ。どうしてかと言うと、結婚するために二人はいい台詞を言い合ったり、いい未来をしゃべり合ったりするわけだけども、ところが結婚してみると、「こんなに育った環境が違ったんだ」とか「こんなに考え方が違ったんだ」とかがわかってきて、それが離婚につながるわけだ。だけどそれを離婚しないで我慢するのは、どっちかがかなりの力を持っているってことで、五分五分の方だったらやっぱり別れちゃうと思うんだよね。映画もそう、結局最後は自分が主演して、自分が脇役して、自分が仕出しをして、自分がカメラをわして、自分がライティングして、自分が編集して、自分が監督して、自分が音楽作って自分が効果もやって……というのがいいわけだけど、そういうことは不可能だから、ある程度の方関係で、自分に対して尊敬してくれる連中を集めるのが一番いいわけだよ。まあそれが黒澤さんなんかの生き方だと思うんだ

——結局、自分の生活と嘘との往復?

勝 そう、街に出ていろんな人に会ったり、その都度その場面をヒントにして頭に入れたところで、それをもう一つ掛けたらどういう風になるんだらうかということから作って

しかしそれがそうじゃなくなつた時、黒澤さんがたいしたことないって思ってる人が回りについてる時には、黒澤さんはたいしたものじゃなくなつちやうわけだよな。尊敬されて初めて、黒澤明、という価値が生まれる。だから俺なんか、黒澤さんとは違うけど、一緒にやってきて、結果失敗したとしても、作ってる途中までは惚れてくれる奴と一緒に仕事しなくちゃ駄目よ。対立するようない。「お前の力と俺の力は五分五分なんだ！」って、オリビックでどっちが入賞するかみたいな、そういう考えを持っているカメラマンとか脚本家とかがいだんじやあ映画は成立しない。

頂上にある何かをめざす映画

映画っていうのはやつぱり、一つの総合芸術なわけで、一つの頂上に向かって歩いてくものなんだ。その頂上にはまだ誰も登ってない。でも、あいつが登るといつているんだから、頂上には何かがあるんだらう、とついでてきてくれる人がいる。その頂上に辿りつくまでの道のりには、てこぼこがあつたり木があつたり、嵐にあつたりするんだらうが、その連中がそういう木だとか嵐から、ガードしてくれる、そういうスタッフにめぐり合つたといと駄目だね。とついで、頂上に登つたら、実は何もなかつたりする。「何だいこれは」

んなものなんて撮つたの」と言われても、「いや、あるかないかわかんないから、俺は撮つてたんだよ」と答えるよね。ところが、頂上につく前に偵察隊が登つていって「頂上に面白いものありますよ」「よし、じゃあ撮らう」というのが今の映画なんだよね。わからないところに登つていく奴がいなわけだ。映画にはある程度頂上にこういうものがあるかわかつて、はじめていく方法と、わからないで登つていって、頂上にやつと着いた時に「こんなことになつたのか」「これのために登つたんだつたら、俺達もつと途中頑張つたのに」なんだ監督、自信なさそうにしてたから、俺達もたまたしてたけど、こういうものがあるんだつて最初からいってくりやあいいのになんてことになる方法の二つがある。言つてくりやあいいって言つても俺も知らなかつたんだからと言つていられないよな。登つてみたら、こういうものがあつた、だけでもみんなのおかかげで登れたんだから、これでいいじゃないかと。だから、本当の映画っていうのは、何ていうんだらうなあ、大きな道楽につながるような気もするんだよね。だけどその道楽が一回当たれば、後はもう道楽じゃなくて、人を楽しませようとか何とかしようとか、自分に今ついでいる運を、もう一つつくりようとか努力していく。最初は(力をこめて)何にも、わ

からないんだよ。自分の歩いていく道の上にはきつといいものがあるんじゃないかなんていう、そういう「とらぬ狸の皮算用」みたいなものが人間の心のどつかにある。それで映画作るとなると作ってるもんだから、苦勞もたいしたことない。自分達の苦勞が報われる価値観がどれだけのものかかってことまでわかつてるんだから。本当にわからないまま登つていくなら、何にもなくつてがっかりするか、それともそこにすいお城があつて「うわーっ、やつたー！」ってことになるか、どつちかだよな。それがロマンのような気がするわけだよ。

——「警視—K」の時は、まだ登つてみないとわからないところから出発されたわけでしょう。

勝 うん、そつちの方だね。だから困るわけだよな、俺なんかは。

——まあ、「警視—K」は「クルール(十三回)で終わつてしまつて、残念だったんですけれど、前に勝さんにお話を伺つた時にも、「いや、いいんだよ。後に続いて来る人がいればいいんだよ。残念だと言つてくれる人がいればいいし、そういうことが肝心なんだ」とおっしゃつていました。その後、どうなつてしよう、勝さん御自身は……。



——幸せになる所というのは作品を見てワクワクする人間のことですか。

勝 そう、そう。ところが、迷惑する方ってのは、お金出したり、製作一緒にしたり、した人達ね。例えば、桜と松と梅持つてきて、これで花生けてくれ、と言われたとする。壺なりお皿なりに、剣山のせて、全部そろえてある。で、完成されたのを見ると、松しかない。「梅と桜どうしたんだ」って聞かれて、「もう捨てちゃつた」と言う。「だってあなた、梅も桜も松も生けるっていうんで、私達は買つてきたんですよ」だけでその梅と桜があつたおかげで、松だけがいいってことに気が付いたん

だ」と。で、松を見て、「いやー、この松の生け方はいいですね」ということになればいい。ところが俺に力がなくて、勝新太郎なんかいらぬ、おろしちやえと、梅と松と桜を三本全部使つて、権力をもつた製作者が生けて、それがヒットした場合、この男は実に哀れになるわけだよな。自分が松だけでヒットするかどうか、ためしてもらえないわけだから。やつぱり力のある人が梅と松と桜という風な、「一、二、三——花札でいったら一月、二月、三月だ、そういうものをピタツと生けたら、やつぱりそれがよかつた、大衆はそれがい」と言う。ところが俺は松だけにしたかつたんだ、なぜ松だけにしたかつたのかつたという、松さえ生けていたら、梅と桜もあつたものは全部想像できるんだ。想像のものは生けなくてもいいんだ、そこにいくためにあそこに松一本だけさしたんだ。だからさし方が違うんだ。まん中じゃない、未来——梅も桜も咲くというだけの場所をあけて、ちよつと横に寄せてあるんだ。そこをわかつてくれ、というんだが、なかなかそれはわからないよな、大衆には。そんな難しいことをいつたつて。

勝新太郎を撮つてみたい

——それがまさに「警視—K」の魅力だつたと思うんですけれども。

勝 とにかく問題が起きた方がいいと思うんだよね。問題が起きない仕事っていうのは、そうだね、安定を求める人にはいいんだらうけれど……。俺なんかはひよつとしてここに金山があるんじゃないかと思つて、それを掘り当てようとして今探しているような感じだね。だから、金山を掘り当てたけど、その時はもう金より銅の方が喜ばれる時代になつてるかもしれない。どつちにしる問題をおこなさなくては意味がない。問題をおこなせば必ず解決する。例えば「警視—K」だつて、「なぜあんなことしたんだ、アクションもないのに」ってよくいわれた。刑事物にはアクションがつきものだけど、アクションなんて沢山見ているじゃないか、もう少し人間を見てみようつて思つた。でも、やつぱりちよつと見きれなかつたんだよね。時間がなかつたとか、いろいろ言ひ訳はできるけど、あの時は力がなかつたんだよね。で、いま力をたくわえなきゃしようがないと思つてずいっと何もしてこなかつたわけだ。また少しワクワクしてきたね、もうそろそろ爆発しそうだよ。俺の山はもうじき爆発するんだけど、その爆発の仕方、どこに迷惑をかけてどこに幸福を与えるか、だげなんだよね。爆発すりや、必ずどつかに迷惑がかかる。しかし幸せになる所も出てくるわけだから。

勝 いやいや、あれは松にも棒にもならなかったかな。

——反省されたんですか？

勝 反省してないんだよ。(きっぱりと)実際にこれ、反省してないから俺はまだ刑務所から出してもらえないような気がするんだよね。これを反省して「私の作り方悪かったです」なんて言えば、保釈かなんかで出してくれるかもしれないけど(笑)。反省してないんだもの。出たらまたやるよ。また今度はもっと沢山花を買わせてきて、結局無駄なものは全部捨てちゃって一本にしちやうよ。それがみんな、コワイんだろうね。極端にいうと、自分が演じてるところを誰かが撮ってくれないかってとこまでいっちゃうわけだ。自分が演出して俳優さんに文句いつてるのを、誰かまたある監督さんが撮ってみたらどうだろうか、と。演技じゃないんだ、これは。勝新太郎が、あの種の役——勝新太郎という役をやっているその役の上において皆にとやかく言っている場面を、撮ったらどうなるだろうか、そういうものを撮ってみたい気がするね。

——ドキュメンタリー、と語っていいんでしようか。

勝 いや、ドキュメンタリーじゃないね、こっちから撮られてるってことを知っているわけだから。テレビでよくドキュメンタリーつ

ていつてやってるけど、今はもうみんな映されてるってこと知ってるんだよね。そういうこと知つたらもうドキュメンタリーじゃないよな。ドキュメンタリータッチっていうのかな。

——すると、まったく知らないところでカメラがまわってる？

勝 それでも、それを撮らせるって言っている以上は、どっかで意識が生まれるわけだから、その意識との戦いになるわけだよ。「ああそうか、廻ってたの知らなかった」って本当に正直に思えるかどうか。知ってて、全然知らなかったふりをする演技もある。自分に今「リアルな芝居をするんだぞ」って命令しながらやってるってことはもう、リアルな芝居じゃないってことだから。

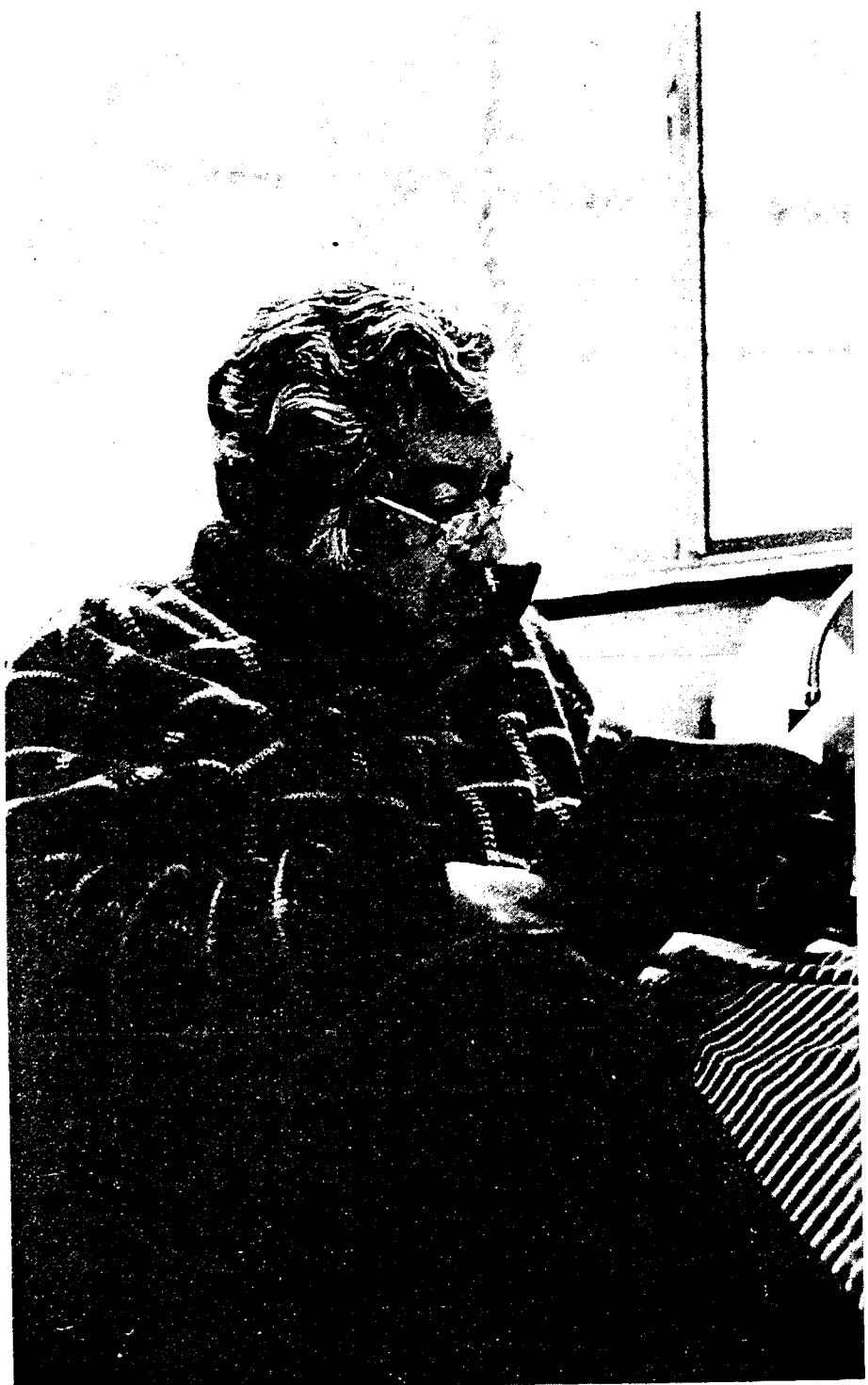
——以前、プロダクション倒産の時に、記者会見で勝さん御自身が、「この模様を全部撮っていたら、面白い喜劇ができるだろう」という意味のことおっしゃっていただけですけれど、それも今おっしゃられたことと、同じような視点ですね。

勝 そう、多分そういうような視点がどっか残ってきているんだろうね。自分の生きてきた体験の中で、女房がいて子供がいて友達がいて、警察関係がいて、政治家がいて、金を貸す人がいて借りる奴がいて……返せる奴が

いて、返せない奴がいて……そういうふうなわずらわしい生き方、生きて行くのがいやになる。ゴミをたくさん抱え込んで、その「ゴミ」の重みに耐えられなくなって自殺するのと、「ゴミよありがとう」と、このゴミのおかげで俺はまた新しい映画がつけれるという考え方と、二通りあると思うんだよね。俺の場合はサラリーマンじゃないから、ゴミが多けりや多いけど、これからの映画作りの財産が増えるって気ている。

——先程の「掛け算」につながりますね。

勝 そう、その「ゴミ」がね、多けりや多いほどいいわけだ。だけどそれが重いからって、ゴミよ、全部いなくなってくれて、今までのゴミを全部どかしたとする。今日からゴミは何もない、ところが今日から落ちてくるゴミも何年か経つと前の重みと同じくらいになる。だけどその重みは、前のゴミの重さにはかなわない。前のゴミの方がずっと苦しめてくれるゴミだから。「苦しみ」という映画を自分が主演で撮らせてくれるとしたら、俺は今ほどいい演技ができる時はないんじゃないかと思う楽しみがある。エレベーターでいえば、階までいっちゃったんだから、これ以上下に落ちっこない、あとスイッチが入ればぐーっと上にいくより他しようがないんだから。(力がこもる)地下何階まであるとしたら、そ



これまで俺はもういっちゃったわけだから。だから楽は楽だね。どうやったら上にいくかって考えてる段階じゃないんだから。

それはもう絶対上ってください！ 次の爆発の話というのは、まだ具体的には決まっていらないんですか。

勝 そう、まだなんだ(ちよつと首をすくめて)。

クロローズ・アップは一瞬のチャンス

勝さんのフィルムでは、クロローズアップが長廻し、あるいは手持カメラによる撮影が独特な魅力なんですけど、ちよつとその辺のことをお聞かせ下さい。

勝 うん、ふつうクロローズ・アップっていうのは「用意、スタート」でカチンと鳴ってから、俳優さんが演技して、それで「カット」かけるけど、本当はその「カット」の音がかけられないところが、クロローズ・アップの魅力だと思います。それはどういうことか、というと、ネズミであつてもネコであつても鳥であつても蛇であつてもいいんだけど、長いことずつとクロローズ・アップで撮つてて初めて欲しいものがでてくる。欲しくないような顔して、実は欲しいんだ。ところが俳優さんの演ずるものは、これが欲しいんだという顔を、はっきりクロローズ・アップで見せてくれるわけだ

よね。だけどそれじゃつまらないじゃない、クロローズ・アップってのは(長い時間の中の)一瞬のチャンスなんだから。だから例えば彼女(本誌編集部員の方を向く)を、クロローズ・アップでずーっと撮つてたとすると、その瞬間の表情ってのは、一分ぐらい廻しているうちの一秒ぐらいにあるはずだよ。クロローズ・アップ欲しかったら、少なくとも一分は廻しておかなきゃならない。「用意スタート!」OK!」っていうけど、OK、なんてのはないわけだ。

勝 —それが実際の勝さんのクロローズ・アップですか。

勝 俺はそうやってたね。だからあなたならあなた(インタビュア)のクロローズ・アップ撮る時に、こう座つて(ぐつとにじり寄る)ずーっと撮つてるわけだよ。

勝 —「用意」はかけているんですか?

勝 いや、かけていない。なんの用意すりゃいいんだよ。今のあなたのその顔は、クロローズ・アップでずーっと撮つてある。一分でも二分でも撮つてある中から、彼の特徴はこれなんだ(と、インタビュアの顔真似をして笑顔をつくる)、これが欲しいと、このくらいのアップで(と再びぐつとにじり寄る)ずーっと撮つておくわけだ。この笑いを撮りたい時に、「はい、笑ってください!」用意、スタート!

勝 —「用意」はかけているんですか?

勝 普通はそうする。そうして撮られたクロローズ・アップの芝居ができる俳優が、プロの俳優だつていわれているけれど、マローン・ブランドでも、ジャン・ギャバンでも、ローレンス・オリビエでも、クロローズ・アップはそうやって撮らしてないと思う。演劇じゃないからね。今もしギャバンが俺と向かいあつていて、クロローズ・アップで撮つてたとする。そのどこ使うかわかんないわけだ。彼女もそう(編集部員)、ずーっと何枚か撮り続けて(写真真を)、この中で一番似合うのはどれかって探してるわけだ。それにもかかわらず彼女が俺にこうやって指さして(と、ぐつとレンズをにらんで指を突き立てたポーズをとる)ポーズとつてください、「用意、スタート!」、パチッ、っていうんじや、撮つても意味ないだろう。それと同じなんだよ。(と立ち上り)ちよつと小便いってやる。(歩きつつ、パツと立ち止り)小便のクロローズ・アップだつて、カメラここにいて(と股の間を指さす)チンポコ出して撮ろうつたつて、チンポコがいやがるよ。(くるつと振り返り、でていく)戻つてくるなり、)だからね、最近NHKの特選名画劇場を見てるんだけど、本当にいいクロローズ・アップがあるね。そういうところにも、先生



が沢山いるんだ。(日本の)劇場でやってる映画は「OK」してやったものばかりでしょ。そんなもの見たって、たいしたことないんだよ。そりや一般の人にはいいかもしれない、「OK」されたものがつながつて、ストーリーも演技もわかる、でも本当はNGのとこ探せばもつといいものがあるような気がする。

勝 —作品によって撮り方は違うと思いますが、「監視」Kだと、クロローズ・アップと長廻しが多くて、ほとんど説明のカットがなかったですね。それは非常に冒険的な試みだったと思うのですが、そうすると長廻しにもクロローズ・アップと同じような意味があるのでしようか。

「どんなもんだい!」の精神

勝 うん、あのね、俺がクロローズ・アップ撮る時には、まずその場面を最初に全部ロングで撮っちゃうわけ。一ぺんテストみたいにして芝居やって、今の芝居もう一ぺんやってって言って、今度はアップだけで全部やっちゃう。その中の、これっぽっち(指の間に小さく隙間をあける)だけ、使うわけ。

勝 —では、勝さんにとって、監督の魅力、というのはどういうところなんですか。

勝 —では、勝さんにとって、監督の魅力、というのはどういうところなんですか。

勝 —では、勝さんにとって、監督の魅力、というのはどういうところなんですか。

お聞きしたくなりませんが……。
勝 うん、抱負になるかどうかわかんないけど、さっきいったように、自分の映画を作ってみたいってことが、抱負なんだよな。ということは結局自分一人てやることになっちゃうことだけだ。

映画俳優の演技って、ちよつともうそろそろ考えなきやならない時期にきてると思う。随分長いこと、歌舞伎、それから大河内伝次郎さんみたいな演技からきてるけど、今の人の演技見ても、大河内伝次郎さんにはかなわないんだよ。なぜなんだろう。どんどん世の中新しくなってきたのに、演技だけ新しくなっていない。さっき言ったように、悲しみの見えない悲しみは、街行つて一般の人を撮ってみりや撮れるだろう。しかしそれじゃ困るわけで、演技してるのが、悲しみの見えない悲しみにならなくちゃ。セックス気狂いみたいな女がいかにかセックスを嫌っているか見せるといった演技、お金がないのがあるようなふりをする演技、すべて逆の事をしているわけだ。その中に時々本当の顔をする人がいる。悲しい時には悲しい顔して、お金がないからお金がない顔をする。それから、人の幸福を自分の幸福のように喜ぶ、ということはある日本じゃないような気がする。日本のレコード大賞なんか見ると、誰かが賞を取ったと

すると、勝さんは実際に居合いをやっていたことは？

勝 全然ないよ。剣道もしたことない。そうそう以前ある剣道の先生が来て、「何流ですか？」て聞くもんだから、「杉山流です」って答えた。そしたら「ああ、やっぱりね」って言って帰っちゃった。杉山流ってのは、按摩さんの流儀なんだけどね(笑)。何がやっぱりだよ。稽古事ってのはあんまりしないね。

それが映画の「嘘」というのてしょうか、「座頭市」などでも、いかにも剣の達人のように見えますものね。

勝 だからよく、あれは速く廻したんじやないかとかいろいろ言われるけど、それはないんだよ。あれは全部ワンカット、そのままなんだ。あと映画ってのは、例えばこの灰ね(と見ると、先程から勝氏が喫っている煙草の先に、灰がかなり長くとまってる)、いくら俺がしゃべっても、この灰のことが、いつか落ちるんじやないかと、ずっと気にかかっている。で、どんどん気にかかってくる、最後の最後に、ポロツとうまいこと自然に灰皿に落ちてくれたら、こりゃホツとするよな。俺のいつてる台詞なんかとは関係なしに、こつち(灰)の方が大事になってくる。そういう事ってあるよな。そこが映画の面白さなんだ。それからこういうもんでも(先程からテーブ

するとワットてみんな拍手して、自分の幸福のようなふりをするけど、顔がこわばっちゃって、ばれちやうわけだよ。そうするとだね、(ふりを交えて)「ちっくしよ悔しい、なんてあんな野郎が！」って言ってくれたほうがよっぽどすつきりするわけだよ。

拍手の大きさとか、全部同じでものね。勝 そう、なんかマナーとしてやってるのかね、非常につまらない人間がうじやうじやいるんだ、芸能界には。じゃあ芸能人にならないで普通のサラリーマンにでもなつたらいいじゃないかっていわれるかもしれない。芸能人は経済観念がないとか、社会常識がないとか、いろいろとか言われるけれど、それだから芸能人になってるわけだよ(笑)。そりゃ殺人おかししたりしちゃう方がいいけど、たいしたことやってないのに芸能レポーターに「どうもすいません」なんて涙流して謝っているようじゃ、芸能界の世も末だなくて、ためになることってあるよな。チャップリンの「ライム・ライト」なんか見ても、末だにの趣味の良さを越せないってのは、どういうことなんだらう。あれはチャップリンの趣味の良さだよ。だから、体験だとか、いい趣味の人生ね。今の若い人達は、怖いものにめぐりあってない。平穩無事な人生を送



に出るかもしれない。(ものが散乱したゴミ箱の廻りをマネージャー氏がそそくさと片付けている)それを、テクニクでもってあれに糸をつけて逆回転でやったとしてもつまらないだろう。今もし入らなかつたとしたら、これだつて(インタビュイーを録音しているテープレコーダーに手をかける)投げるかもしれない(笑)。でも、「これだけは(やめてくれ)」ってなるじやない。それは脚本だと駄目だよ。現場にいて初めて、怖くなつたり、面白くなつたりするでしょ？

——そうすね(笑)——(内心ホツとする)。まったく考えていなかった展開でした。

勝 それがつまり、映画の楽しいところなんだよ。終わつたらちやんとこうして片付いてる(既にマネージャー氏が投げたものはすべてきちんとテーブルの上に戻してある)。またやろうかと思えばできるけど、普通はやらないよな。予算があるから、できないわけだ。何遍でもやるとなると、予算では百万円のカットが、五百万円になり、五百万円になって、五百万円になつてもまたOKのカットがない、「もうやめてくれ！」といわれてようやくやめてたんじや、間に合わないわけだ。それが映画なんだよ。

(六本木、勝プロダクションで)

OKが五分後にできるかもしれないし、一年後

バラエティ 1980



勝新太郎

This is the
Variety
Show

「1年ぶりにT.V界にカムバック、
プロデューサー&監督として主演
1人3役のワンマンショー」
「警視-K」(日本テレビ)

俺の世界に入ってきて来たなら楽しく遊んで帰ってもらおうぜ

構成・青木 誠
撮影・西川浩司

脚本は誰にも持たせない。これが「警視-K」の基本姿勢である

スタッフや出演者をスラリとまわりに集めて、そのなかで勝新太郎が身ぶり手ぶりよろしく独演会をひらく。それが、これから撮ろうとしているシーンの説明なのだ。スタッフが撮影準備に取りかかっているその片隅で、スクリプター相手にセリフが書きこまれる。勝新太郎がブツブツ呟くように語るセリフを、その直後の撮影で俳優がしゃべることになるのだ。

「今回はとくに台本なしというやつをエスカレートさせてみようかと思ってるんだ。台本はなくてもいいんだよ。脚本家さんと打ち合わせをして、こまごまやって、というとはあるけど、机の上で見つけたセリフとか机の上で見つけた笑いと、現場へ来て見つけた笑いと、これは全然違うからね」

日本テレビが10月の第1週からスタートさせる「警視-K（火、午後9時）」を演出する勝新太郎の、これが基本姿勢である。勝新太郎にとってテレビでは初めての現代劇、それに「影武者」の主役を降りて以来1年ぶりの仕事ということもあって、何かと話題の多い今回のドラマだが、何よりもその演出ぶりの型破りなことが目をひく。

もともと台本に忠実に、といったオゾンボックスな方法とは縁遠い人だが、今回のように、撮影現場でスタッフの誰一人として台本を持たず作業を進めているなんて光景は珍しい。撮影は、勝新太郎のなかにあるイメージに従って動き、演技はカメラが回る直前、というより回りながら考えられているといった方が正しい。

「俳優が台本読むだろ、何も考えないでいいんじやないか」と見つかつちやつてるわけだ。



これから起こる未来を知ってるのは俳優さんだけなんだよ。次の場面がどうなってるか、自分が最後にどんな死に方をするとか。でも知ってたらおかしいでしょ。だからそれを知らずに俳優さんの役柄だけでやってほしいんだよ。ドキュメンタリーじゃないけど現代劇なんだから、現代の人のリアクション、現代の人の私生活の演技でなくちゃね。役柄の演技じゃ駄目なんだよ」

勝新太郎のいう現代劇とは、時代劇に対する現代劇という意味あいではなく、ただいま現在、この日本でくりひろげられている現代のドラマということである。今回の撮影にしても、スタジオはいっさい使わず、新宿駅の東口にあるビルの一フロアを借りて、そこに刑事部屋をメイン・セットとして組んだばかりはすべてオール・ロケである。そのメイン・セットにしても、スタジオではなくわざわざビルのなかに組んだのは、スタジオのセットは限定された空間ではないが、ビルの一室ならそのまわりこそそのまま現代の街が広がっているという

わけなのだ。たしかに、その刑事部屋から外を見ると、眼下には新宿駅の構内とそのままにゴチャゴチャとした新宿の街が広がっている。今回のドラマでは、そうした街の呼吸のようなものを捉えてしまいたいという意欲のあらわれなのだろう。

勝新太郎のこうした「現代感覚」とその独特の「演技論」を組み合わせると、そこにはドラマのなかのリアリティと、どこまでも浮かび上がってくることに気付く。「俺がいましゃべってるのをあなたが聞

ているよな。その聞いているのをこっぴちか
ら撮ってるんだから、これはもう二度と出
来ない芝居だよな。俺も二度と出来ない。
だからそれはオモシロイんだよ。ただ、そ
れが面白い場面を撮っているかどうか、な
んだよな。お客さんが退屈する場面であら
りリアルに撮ったってそれは面白くないん
だから」

勝新太郎のこの持論からいくと、どうし
ても現在の日本の俳優が見せる演技に不満
を持たざるを得ない。

「全部が全部じゃないけどね。だいたい俺
は映画やテレビ見ないんだ」といって、ま
わりの人間を見渡してみる。「あんたがイン
タビューしてるだろ、あんたはそれを聞いて
いる。彼は写真を撮っている。それから
(マネージャーを指して)こっちはゴハン
どうします? なんていっている。それを
見て来ているから、いまの俺には俳優さん
の演技はちよつと合わないんだよ」とお

かしように、まわりの人間を見比べる。

「俺が好きなのは、その、完全なものが出
てくるというか、完全な表情、完全なその
役に合ったセリフが出て来るのは、偶然完
全、なんだよな。前の日に見つけて、前の
日に計算されて、相手がああしたらこうし
ようなんてのは巧くないんだよ。だからハ
プニングというのがベストなんだけど、ベ
ストはハプニングが生んでくれるんだけど、
けつしてアドリブでも何でも無い。ただ、

これは芸術じゃないんだから そんな香り高くはないんだから

「警視-K」のなかで勝新太郎が扮するの
は、今宿署(新宿を想定したものだろうが、
コンチクショウのもじりでもある)の通称
「ガッツ」。こと賀津警視。警視というから
には署長クラスなのだが、根っからの現場
好きで2人の部下(谷崎弘一と水口晴幸)
を引きつれて捜査の陣頭に立つ、というの

がその設定。5メートル
はあろうかという鎖つき
の銃を携え、それを投
げ縄式に飛ばして犯人の
手首にガチャン、といっ
た新趣向をはじめ、勝新
太郎らしい豪快なアクシ
ョンもあるが、ドラマの
狙いはあくまで、人間ト
ラマ。

俺の体験とか、俺がいままで付き合ってきた
た何万何千という人の名刺のなかららひと
つだけつまみ出して来て、それを入れてい
るだけだよ」

日本の俳優の、いかにも……らしい」と
いった演技を時代劇といわず現代劇、ホー
ム・ドラマだろうがアクションだろうが同
じ調子で見せつけられて、いかげんウン
ザリしている身には、この勝発言いたく新
鮮なものに驚いた。

「世の中悪い奴がいたら殴りつけたいだろ
うし、そいつはどつか一般の人のところに
ウロウロしないでほしい、法律の力が何
かで。たまたまそういうものを自分でやっ
ちやう男なんだな。極端なことだったら、
川の底の汚い泥を取るけど、取っても取
っても泥は来る。それをまた取りやあいい
けど、その機械のスイッチを止められたら
そこで止まっちゃうよな。いくら泥を取り
たいっていったって、上司の命令かなんか
で。でもこの男はその時自分でスイッチを
押しちゃうんだな。スイッチを自分で押し
て、自分で取っちゃう。たまたまそんな男に
娘がいた。娘だっけいつか泥のなかに入っ

ちやう時代なんだけど、自分の娘は絶対に
そうはならないと思ってる。だからデイス
コで娘見かけたから、凄じョックで犯人ど
ころじゃない。そんな男がたまたま刑事だ
ったから犯罪と関わり合うんでね……」

だから刑事ドラマといつても犯罪捜査を
主体にしたものにはならない。むしろ刑事
より人間としての「ガッツ」、わけでもその
娘との生活がクロス・アップされそうだ。
その娘役には、勝新太郎の奥の娘である奥
村真粧美が起用された。もちろんドラマは
初出演である。勝新太郎がこどもも狙って
いるのは、つくりものの父娘ではなく、
それなりのリアリティを持った父娘だろう。

「この俺がどんな感じで見ろ、とか感じて
くれとはいえないから、それを見た人が全
然違ふね、とかガツカリなんて俺に教えて
くれればその方がいいんだよ」といいなが
らも、この父娘像はほぼストレートに勝父
娘だと思っただいようだ。

「もう全然そのまま。もし真粧美と生活し
ていたらあなるな、ってことばかり。と
いうのも俺はいま一緒に暮らしていないか
らね」と、この起用が大そう気に入った様
子だ。

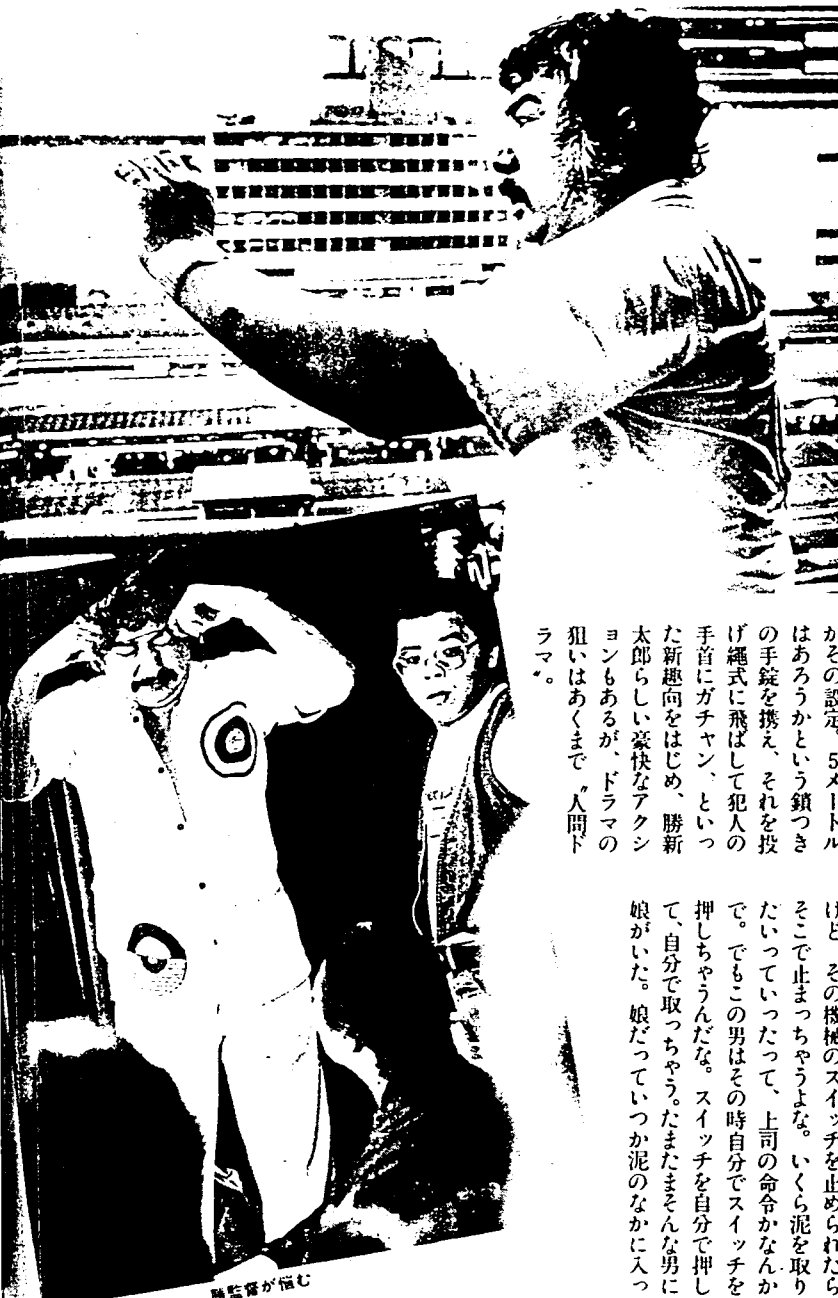
「最初に真粧美の芝居撮っちゃったんだけ
ど、それが俺が一番狙ってる芝居なんだよ
な。他の人にそれに合わせてくれとはいえ
ないけど、こういうふうにしていくならい
いなあと思っているのを真粧美がやってく
れるわけ。というのは真粧美は素人だから
この現代劇のレベルを統一するなら真粧美
のレベルで統一すればいいと思ってる。
俺もどつちかといえば真粧美のレベルに合
わせてるんだ」

話を聞いているだけでユニークな刑事ド
ラマが生まれそうな気がして来る。

「ドンパチ、ドンパチって映画はよくある
けど、みんなもこんなのがあつてもいいな
って気になるんじゃないかな。俺自身、そ
ろそろこういう刑事ドラマが欲しいなと思
ってたよな」

勝新太郎にいわせると「警視-K」は「世
話もの」なのだそう。

「時代劇でいえば長屋ものね。ヨーロッパ



「このシーンは……」監督が悩む



川谷拓三と撮影開始前にまず一杯

ていえば「居酒屋」とか「天井桟敷の人々」とか「ジェルソミーナ」もそうだな。だけど色は同じだと芸術映画じゃないから、

おい、そんな黒澤みたいに出て来ないこと、いなよ!

「野視-K」では、勝新太郎はゼネラル・プロデューサーであり、主演であり、それに脚本や監督（1話から3話まで演出）もするから、もう大ワンマン・ドラマといえる。撮影現場というものはだいたい監督中心に動くのだが、監督のうえに主演までくっついて、そのうえドラマのイメージが勝新太郎の頭のなかにしかないのだから、

ああいう芸術の香り高いものにはならないよ」

すべて勝新太郎中心に動いている感じ。その代わり本人はフル回転である。ドラマの進行を指示し、演出し、演技する。何せ御大の意向を確かめないことには何ごとも進まないから小道具から次のシーンの準備から常に指令を出している感じ。同時に、自分でも抱いているイメージを具体化するために、「あれはどうすればあなるのか?」といっ

たテクニカルな質問をスタッフに発し続けている。

「いやあ、監督はすべて分かってんでしょうけど、こっちは何が何だかサッパリ分からない。芝居してるんだか、してないんだか、人形みたい。だから欲求不満になっちゃってね」と出演者の一人である川谷拓三が嘆くのもよく分かる。野外で撮ると思っていたシーンが、アツという間に刑事部屋のセットに変更になったり、そこでしやべりはじめたセリフが「あ、それやめちやおう」の一言で消えていく。俳優がとまどうのも当然だろう。

「うむ、とまどうよね。でも俺の世界に入ったら、俺のやり方が正しいんだな、って気になってると思うよ」と本人は泰然自若としたもの。たとえば、勝新太郎自身が監督する時はともかく、他の監督の時はどうなるのか。

「俺の世界がつくる色だから、俺の世界にパスポート持って、あなただたらどうぞって入って来る人だから。監督さんのその良し悪しは知らないけど、俺がOK出した人だけは、俺の世界で楽しく遊んで帰ってもらおう」

その姿勢いささかも変わることなしであ

る。確かに勝新太郎は大ワンマンだけど、現場の空気は、絶えず監督を気にしてピリピリしているかというところではない。緊張感があっても意外にリラックスしている。それは勝新太郎の持っている生来の陽気さや太っ腹な性格が現場に浸透しているからだろう。それに、たとえばこんなエピソードがあった。次の撮影の準備が進んでいる間、勝新太郎はそれを見ていた出演者の一人をつかまえて、「ちよつとそこに立ってごらん」といって「おい、そのライト持って来てくれ」と怒鳴る。青いセルをかけたライトを彼にあてながら、自分はスチルマン氏のカメラを引つたくってパチパチリとやりはじめた。

「あれはね、水口にこういうふうに撒けるよ、俺がメセンをこうこうしてといっって、ライトをこうあてたらこうなるよ、って教えていたんだよ。俺はそんなに悪いセンスじゃないだろ、俺を信じてらどうだ、ってことだよ。彼も写してもらったの見て、なるほど俺が思ってたのと大部違う映像で撮ってくれてたんだな、って分かったと思っよ」と太っ腹であることは別に、勝新太郎の映像に対する神経の細やかさが、スタッフを牽引していることは確かだ。それとやはり陽気さ。

第1話のクライマックス・シーンで、秘密兵器の鎖つき手錠を投げて犯人の手首に食いこませるシーンだが、それがアップになった時、いかにも手錠自身で手首に食いこんだように見せなければならぬ。だからカメラの死角から監督自身が手錠をチヨコ、チヨコと出して手首にぶつけるのだが、何回やってもハマらない。横から助監督が、「こうこうしたらどうですか」と助け舟を出して、その通りにやっているつもりなのだろうが、巧いかない。「そうじやないですよ。こうですよ」

「分かってるよ、その通りやってんだよ。でも巧いかないんだから。そういう出来ないこと、いなよな、黒澤だってそういうこといったんだから」

すると現場は、エキストラまで含めて大爆笑になった。